울산대학교 연구논문집 제19권(인문 : 사회과학편) 제 2 호, pp. 49～56, 1988.
Uou Report Vol. 19, (Natural Science and Engineeing) No. 2, pp. 49～56, 1988

日本語の音調的単位と実際

崔 光 祐
日語日文學科
(Received 1988. 4. 30 접수)

〈要　　約〉

日本語の音調的単位として内部に「主核」「準核」という要素をもった「アクセント句」を説定し、最後に朗読における具体的な例お提示した。

일본어의 음조적 단위와 실제

崔 光 祐
日語日文學科
(1988. 4. 30 접수)

〈要　　約〉

일본어의 음조적 단위로서 내부에 「주핵」「준핵」이라는 요소를 가진 「액센트구」를 설정하고, 끝으로 낭독에 있어서의 구체적인 예를 제시했다.

話しことばにおいては文章の句切りが意味伝達に重要な役割をもつ。日本語(東京語を中心とした、共通語をさす)の場合は、この句切りがアクセント(以下略してアとも)の統語機能によって支配され、一つの音調的単位をなしている。ここでは、これまでの音調的単位に関する学説をふまえて、語学教育における朗読の方法論を追究していくことにする。

Ⅰ. 音調単位に関する従来の主な学説

(1) 橋本進吉の文法的単位としての「文節」[1)]

1) 橋本進吉、"国語法要説"、「国語科学講座」、6輯(昭19)、p、9。

① 一定の音節(これは無論一つ又は二つ以上の単音から出来たものである)が一定の順序に並んで、それだけはいつも続けて発音せられる(その中間に音の断止が無い)。

② 文節を構成する各音節の音の高低の関係(即ちアクセント)が定まっている。例えば、東京では、「今日も」は「キョオモ」のキョの部分を高く、オとモの部分を低くいつも発音し、「いい(好)」は初のイを高く次のイを低く発音する。

③ 実際の言語に於ては、その前と後とに音の切れ目をおくことがある。

(2) 有坂秀世の「シンテグマ」[2)]

R. JakobsonのSyntagma(文の構成部分としての語)の概念は、日本語に適用すれば即「文節」である。アクセントの上からは、シンテグマか各一個のシンテグマ頂を持つことによって標識されるのと同様に、「文節」も亦各一個の頂点を持つことによって標識される。例えば、ケサアサガオがサキマシタの如く。

日本語のアクセントの型は、具体的なものとしては、文節アクセント以外には考をることができない。(中略)文節アクセントの型が顕在的な形の上の分類であるのに対し、単語アクセントの型は、潜在的な機能(文節構成上の機能)の上の分類に過ぎない。

(3) 神保格の「準アクセント」[3)]

アクセントの型とは総ての場合に通じ或単語に固定的な高低関係であるというならばウシガイマス」の様な高低は連語の時に限って顕れるもの、その連結に半ば固定的なものということが出来る。この意味で強いて名づければ連語の「準アクセント」とでも云うべきであろう。

(甲) 平板式+起伏式

ナク(泣)+ワケ(理由)−ナクワケ

平板式+平板式

ヒノミノ(火の見の)+カネガ(鍾が)−ヒノミノカネガ

(乙) 起伏式+起伏式

カラスガ(鴉が)+イマス−カラスガイマス

起伏式+平板式

イヌガ(犬が)+イル−イスガイル

(4) 佐久間鼎の「アクセント小節」[4)]

音声の強さの布置によって、または高さの布置によって成形を得るもの—アクセント小節。一つの構文において発音の上で続けなくてはならない単位を「文節」と名づける。それは一面では構文論上の意味、すなわら構文の成素としての側面をそなえているわけだが、その規定においてはじめから発音の上の条件がついてまわっていることも、見のがせない。そうして実際上前記のアクセント小節は、多くはこういうまとまりとしての「文節」と合致する。つまり「文節」を「アクセ

2) 有坂季世、"アクセントの型の本質について"、「言語研究」、7、8号(1941)、pp、84-85。
3) 神保格、「国語音声学」(東京:明治図書、1925)、pp、188-191。
4) 佐久間鼎、"単語とアクセント"、(「日本言のア」東京:中央公論社、1942)、pp、9-10。

ント小節」と呼べる。

(5) 平山輝男の「音調節」[5]

アクセントの基本単位として文節をあげ、文節を「基本音調節」(略、「基本節」)、準アクセントをもつような音調節を「派生音調節」(略、「派生節」)、「派生節」は連文節になる。

例) ヒニアタル(基本節)

ヒニアタル(派生節)

(6) 服部四郎の「単語結合体」[6]

文節内部の音体止の存在に注目して(例、ドーイウ|コトオ|ココロカケタラ|イイカ|)文節を「単語結合体」と見る。

アメデモ:「安定的単語結合体」(または「かたい結合」)

アメガフル:「臨時的単語結合体」(「ゆるい結合」)

このニつの相違点は、例えば、上の例で「アメデモ」の「デ」よりは「アメガフル」の「フ」が自己のアイセントを現わす傾向が著しい。

(7) 川上蓁の「句」[7]

音調的単位をすべて「句」といい、「句」は上昇アクセントによって区分される。

音調的には、「文節」も「単語」も存在理由は無く、ただ必要なのは「句」及び「アクセント核(或は「滝」)である。

ニワニサイタオミナエシ……1句

ニワニサイタオミナエシ……2句

ニワニサイタオミナエシ……3句

「アメデモ」が「アメデモ」ともよく言われることに着目して「単語」を音調の基本単位と認める。

(8) 山口幸洋の「アクセント節」[8]

「文を構成する要素」として構文論的にとりだされる分節が「文法節」であるように文アクセントの分節が「アクセント節」である。「アクセント節」は、大きくは文章から小さくは1モーラまで種々さまざまでありうる。

〔ニ「ワノキ」ノエダオオ」ックノデ、オ「ジ」ーサンニ、シ「カラレタ〕 ……3個
ア節　ア節　ア節

〔ニ「ワノキ」ノ、エ「ダオオ」ッタノデ〕 ……2個
ア節　ア節

以上の(1)~(5)までは、文節をアクセントの基本単位として、(6)~(8)は実際の発音そのものにそくして単語を基本単位と認め、そこから拡大解釈している。

5) 平山輝男、「日本の音声」(東京:岩崎書店、1960)、pp、55-58。
6) 服部四郎、"文節について"「言語学の方法」(東京:岩波書店、1947)、pp、423-433。
7) 川上蓁、"準アクセントについて"、「国語研究」、第7号、(1957)、pp、45-48。
8) 山口幸運、"文法節、言語節、アクセント節"、「国語国文」44巻1号(1975)、p、46。

以上の学説から音調単位として「単語アクセント」を認め、それに接辞がついたものを「文節アクセント」、そして「文節アクセント」がいくつか集まって一つの息の段落(Breath Group)をなしているのを「句アクセント」と分析的に名づけられよう。この三つの関係は独立的な関係ではなく、「句アクセント」は「文節アクセント」を、「文節アクセント」は「単語アクセント」を考慮してのみ存在する包含関係で、「単語アクセント」から「句アクセント」へだんだん具体化され、逆に「句アクセント」から「単語アクセント」へはしだいに抽象化されると思われる。

単語アクセント	文節アクセント	句アクセント(連文節)

しかし、実用的な面からはこの三つの単位を一律に「アクセント句」と名づけても差し支えないようで、これは川上の「句」と山口の「アクセント節」と同じ意味である。すなわち「文節」の概念を拡張した意味での「アクセント句」とは、

〝アクセントの統合機能によって支配される一つの音調単位として、内部構造は、無核の平板が、たった1個のアクセント主核[9]或はそれに属するいくつかの準核からなるもの〟

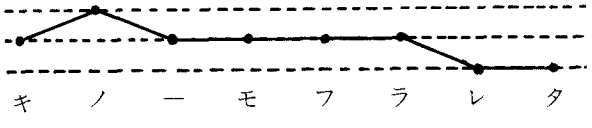
と定義できよう。

単位記号としては／／を使う。

2．「アクセント句」の内部音調

／キノーモフラレタ／(振)に対する／キノーモフラレタ／(降)の音調。後者の中で「ノ」は主核、「ラ」は準核。

(1) 階段式下降調



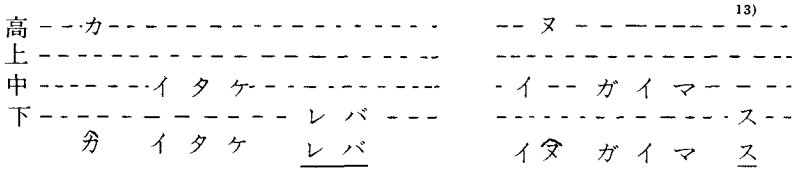
川上蓁：／キ「ノ」ーモフラレタ／[10]

佐久間鼎：／カラスガイマス／[11]

宮田幸一：／nǎo-ūru／蓁を得る)

／jūkìga-hūru／(雪が降る)[12]

三宅郎：



9) 一つのアクセント句の中で最も高い一つのアクセント核を主核、それ以外のアクセント核を準核と呼ぶ。例えば、／アメがフル／(雨が降る)で'ア'は主核、'フ'は準核に当る。主核は'ア'準核は'フ'で示す。／アメがフル／。

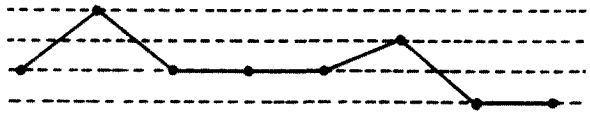
10) 川上蓁、op. cit, p、50。

11) ibid, p、52。

12) 宮田幸一、〝新しいアクセント観とアクセント表記法〟「音声の研究」、第1輯(1927)、pp、21-22。

13) 三宅武郎、〝アクセント四段観〟、「音声学会会報」37号(1935)、p、4。

(2) 重起伏調



キ　ノ　ー　モ　フ　ラ　レ　タ

秋永一枝：／キノーモフラレタ／、／キノーモフラレタ／とは発音されるが／キ「ノ」ーモフラレタ／と発音されない。[14]

寺川喜四男：(「鼓を売った」に対して)「鼓を打った」のウはやや原型に近く高められ、一種の軽い重起伏調をあらわすのが普通のように思われる
／ツズミオウツタ／[15]

「アクセント句」の中に準核がいくつも存在し、そこから声がすこしずつ下降することは確かなようで(従来の高低二つの段階しか認めない「段階観」とか「トーネム観」と違う)、そしてその下降が「段階式」か「重起伏式」かという問題はまずこまかい音声学の問題で音韻論的には問題にならないだろうし、実際「アクセント句」の内部構造にはなんら影響がないようである。もし準核の数が多くなる場合、つなりあまり低くなって声を出すのが苦しくなる場合は生理的に準核がいくぶん上がることはありうるだろうと思う。しかし、準核が主核と区別がつかないほど上がるとその単語から別の「アクセント句」を作るおそれがあるためであろう。

3．一般的に「アクセント句」になる可能性が強いもの。

(1) 選択的(構成文節のアクセントが規則によって定められる。数が多い。)

① 連体詞または体言の所有格＋形式名詞的なもの。
／あっちのほう／　／そんなこと／
／ぼくのほうから／

② 用言の連体形＋形式名詞的なもの。
／ちいさいときから／　／できないことを／
／にくいやつだ／　／おっしゃるとおり／
／かえるころ／

③ 用言の連用形＋補助用言
／でてくると／　／かえってみると／
／ほしくなる／　／きてください／
／さむくない／　／あそびにいく／
／いきはしない／

(2) 義務的(反省型[16]の発音が変化する。数が限られている)

14) 川上蓁、op. cit, p、54、から再引用。
15) 寺川喜四郎、「標準日本語発音大辞典」(東京：大雅堂、1944)、pp、42-43。
16) 「単語が持っている固有のアクセント型」という意味の宮田幸一の用語。

① 補助動詞

／もってくる／ ／とってくる／

／よってくる／ ／かってくる／

② 連体詞[17]

／このこ(この子)／ ／そのひと(人)／ ／つぎのこと／

／ふたりのどろぼう／ ／よそのひと／

／きのうのよる／

③ 形式名詞

／あさのうち／ ／めのまえ／

④ 複合語

／とうほくだいがく／ ／かぶしきがいしゃ／

⑤「の」による複合語

／すぎのき／ ／おとこのこ／ ／なのはな／(菜の花)、／たのくさとり／(田の草取り)

(＊／たの／くさとり／)

4．アクセント表記の実際

(1) 水谷修、水谷信子「An lntroduction to modern Japanese」(The Japan Times, 1982, p. 193)

A:どうし「たんですか。なにかこ「まったこ「とができたんですか。

B：ええ、じ「つはス「トーブをつ「けたままき「てしまったんです。

(2) Anthony Alfonso「Japanese Language pattern」(Tokyo：Sophia University L.L. Lenter of Applied Linguistics, 1980, p. 616)

〔ŝim bun+niwa/Kʸoo/ame+ga+furu+to/Kaite+arimasta+yo〕

〔Seŋ sei+wa/moo/kaette+mo+ii+to/ossaimasta〕

(3) 宮田幸一「日本語のアクセントに関する私の見解」(「音声の研究」、第二輯、1928、p. 36)

niisaŋ bòkuno aŝàŋaoga sakimàʃ ita Sofewa-jòihánàdesujo ìtuka-aŋeta nàe nodaròo mìnaide hítòtsu ifòoatete-mjòoka u'suàono ma'ruzakikana

(4) Bernard Bloch「studies in colloquial Japhnese IV」(「language」、第26巻、一号、1950、p. 119)

$_4$m u$_3$k a ŝ i m u k a$_2$ŝ i$_2$ a$_3$r u t o k o r o$_2$n i$_4$o$_2$j i$_3$i s a ñ t o $_4$o$_2$b a$_3$a s a ñ

ŋ a $_4$a$_2$r i m a$_4$s t a.

17) 以下の②③④⑤⑥は「明解日本語アクセント辞典」には見出し語として出ている。

$_2$a$_3$r u$_2$h i $_4$o$_2$j i$_3$i s a ñ w a $_4$y a$_2$m a$_3$e k a r e e d a o h i r o i n i $_4$d e$_2$k a

k e m a$_4$ŝ t a.

① は、いめゆる文節に充実してアクセントを表記したもので(文節アクセント)、話しことばの現場ではこういうふうに発音することはまずないようであり[18]、外国人の初級の学習者のためいちいち文節ごとに表記したようだが、かえってぎこちない発音を誘発するおそれもあるだろう。そして(き「てしまっ「たんです)は(着てしまったんです)の意味で、「来てしまったんです」という意味としては(きて「しまったんです)の方が正しい。

② は、「アクセント句」の概念を生かした非常に進んだ表記(ここでは「/」が「アクセント句」の境目をあらわしているよう)で見ればすぐ分かりやすく自然な話し方が可能であるように工夫されている。しかし準核のところまでは行っていない。

③ は、ある場合は文節ごとに(| | bokuno a saŋaoŋa sakimaʃ ita | |)、またある場合は句アクセントに(| | ituka-aŋeta naenodaroo | |) 表記していてまだ「アクセント句」の概念がはっさりしていないようである。

④ も文節アクセントと句アクセントがまじっていて、特に文節の終わりの部分が上昇するイントネーシンがアクセントとして表記されているのは大さなミスであろう。

5．締め括り

以上の理論と実例を根拠にして、話しことばをありのまま視覚的にあらわすと次のよつに簡略表記できると思う。

／オトナニ「ッタラ／キップオウルヒ「ドニナ「ートオモウワ／

／ヨージがナイノニ／アケタリシメタリシテワイケマセン／

或は、

／ヨージが「イノニ／アケ「タリ「ジメタリシ「デワ／イケマ「セン／

「アクセント句」の最初の単語はかならず第1拍と第2拍との間に上昇があるというのは普遍的な事実でいちいち表記する必要はない。[19]（頭高型は別。この場合の上昇は第1拍の前で起こる。）それで平板式だけの「アクセント句」はただ「アクセント句」の表記だけで間に合う、

／ワタシガキノーケンガクニイッタゾーセンジョ／或は。

／ワタシガ／キノーケンガクニイッタゾーセンジョ／或は、

／ワタシガキノー／ケンガクニイッタゾーセンジョ／或は、

／ワタシガキノーケンガクニイッタ／ゾーセンジョ／

起伏式の場合はアクセント核を主核(「「」)と準核(「「」)に分けて表記する。（アクセント核が一つしかない場合は「「」だけで充分。）準核が2つ以上あるときは「だんだん規則的に下がる」と

18) '生きた日本語でないという感じがする'、和田実"アクセント、イントネミヨン、プロミネンス"「日本語と日本語教育—発音表現編」(文化庁国研、1969)、p、66。

19) いわゆる'おそあがり'とか'はやあがり'とかいう「文頭イントネーミヨン」が加わった場合は例外とする。

いう原則が前提される。

「アクセント句」が短いほど発話の遅度は遅く、発音は明確になり、長ければ速度は速く(もともとはその逆だろうが)発音はあいまいになる傾向があるようで、一般的にラジオなどのニュースとか子洪むきの童話朗読などは前者に属し、一般対話はほとんど後者の方が多いようである。語学教育においては話しことばの速度感覚とくに相手の速いことばを理解するためには、初級の段階でからも短い「アクセント句」からだんだん長い「アクセント句」へとくり返そして練習することが大切だと思う。